

「らしさ」輝く附属小



第8号 令和7年 5月30日（金） 校長 森内 秀学

附属小「らしい」ね！スマイルチーム活動

5/27（火）の児童集会は、「かしこさプロジェクト」のメンバーによるスマイルチーム活動の紹介でした。スマイルチーム活動とは、学校を楽しくするために、やりたいことをやりたい仲間が集まり、相談し、企画運営していく取組です。右は、その中の一つ「学力向上チーム」。「わからないところを教えたり、クイズ大会を開いたりといった活動で、力試しなどのテストの点数を上げ、勉強に対していい印象を持ってもらえるようにする、学力向上を目的としたチームです」と紹介していました。



右は、その具体策の一つ、「勉強教室」。毎週水曜日の中休みに、集会室で子どもが子どもに勉強を教えるのだそうです。素晴らしい発想ですよ。他にも、謎解きチーム、図書チーム、探究チームがあり、それぞれ魅力的な活動を予定していると紹介がありました。

こうしたプロジェクト活動は、これから本格的に始まっていきます。きっと、うまくいかない場面もあるでしょう。でも、こうした発想自体が附属小の子どもらしいと感心しましたし、学校全体で盛り上げていくべき取組だと感じました。今後をお楽しみに。



いよいよスタート！芝生広場

昨年度の創立150周年に伴い、傷んでいた芝生が張り替えられた1年生教室横の広場。運動会が終わり、ようやく使用解禁です。すぐに遊んで、すぐに戻ってこられるこの場所は、1年生の癒しの場所です。

これから、6年生とのパートナー遊びでも頻繁に活用されていきます。

生活科で学校探検

1年生が2年生とパートナーを組み、学校探検が行われました。右は、校長室に来た時の様子。おそろおそろ入ってきてインタビューする子どもたちに校長室の役割を伝えたあと、ソファに座っていいよと言ったら大喜び。その後もたくさん子どもたちがやってきました。これをきっかけに、早く学校になじんでくれると嬉しいです。



北斗の学校「らしさ」

運動会の余韻を残しつつも、北斗の学校は次へ動き出しています。特に、対外的な授業公開が多い学校ですので、運動会後2週間で12本の授業公開が行われました。運動会期間中は、教職員も勝利に向けて子どもと共に心を燃やしますが、その傍ら授業で学級を創ることを忘れていません。

右の写真は5年3組の学級掲示です。学級目標の下に教科の学びについての掲示があります。担任の下田教諭の研究教科は社会科です。本校社会科は「幸せ」がテーマです。社会科を通して人の思いや願いに目を向けることができる子どもを育てています。社会科主任の6年1組田中学級にも「見えないものが見えるようになる」の掲示があります。



教科で学級づくり



この写真は、4年1組鈴木学級の掲示です。

「Rikastagram」と題して、子どもが見つけた身近な自然を掲示しています。4年生の理科では、身近な生き物の成長や季節の変化に着目して観察



することを通して、予想や仮説を発想する力を育成します。理科室だけでなく、理科の時間だけでなく、日常に理科の学びがあることで、子どもは生活経験を基にしながら主体的に問題解決をしたり、理科で学んだ視点をもとに物事を見たり考えたりすることができるようになります。

子どもたちの日常に教科の学びがあり、教科の学びを中心に学級づくりをするのも北斗の学校らしさです。6月の授業参観では、お子様の学級掲示にも御注目ください。

教頭 橋田 晶拓

教えから学びへ³



引き出し

今月16日(金)、対馬の市立小学校から2名の先生方をお招きし、6年生単式3学級、5・6年A組の算数科授業を公開しました。

そのうち、5年A組では、「整数×小数の計算の仕方を考える」場面での授業が行われました。子どもたちは、「4年生で小数×整数の学習してたよね。」という級友の発言をもとに、「4年生の学びを生かしていく」という見通しを抱いていました。

既習内容を生かしていくためには当然それが身に付いていることが前提ですが、全ての子どもがそうであるとは限りません。そこで、5・6年A組担任の本村教諭は教室に1～5年生の教科書を並べておき、自由に閲覧できるようにしています。子どもは自身の課題に応じて、これらの教科書を参考にして既習内容を思い出しながら、学びを進めていました。



記憶は「思い出す」ことで強化されます。課題解決に使うことができる重要な情報だと認識されたり、既習や経験と関連付けられたりすることで、より正確に定着し、スムーズに引き出すことのできる記憶となるのです。御家庭でも、教科書を並べるというちょっとした一工夫で、子ども自身の思考の引き出しを増やし、学びを加速させていきませんか。

主幹教諭 松尾 勇哉

背伸び



「いつもの」

1年生が給食の準備をしている様子です。この日、担任が不在の中で給食の準備に取り掛かっていました。「当番じゃない人も並んでいい



んだよ。」「今日は先生の分はいらないよ。」「減らしてくれる人はいませんか。」「いろいろな声が飛び交う中で、どうにか自分たちで準備をしようとしていました。

代わりに入った私に尋ねてくる子もいましたが、私は次のように返しました。

「みんなのいつものようにやってごらん。」

これまで、どんなことを大切にしてきたのか確かめながら、やってみようとしている子どもたちにとっては、その声掛けでも十分だと思ったからです。担任が不在の時は、子どもたちが目いっぱい背伸びをするチャンスです。子どもたちは困りながらも、「いつもの」やり方を確認しながら、やり遂げることができました。

学級によって「いつもの」文化があります。共に過ごす仲間で積み上げてきた文化を、担任不在を機に、磨き上げていた一年生を頼もしく思いました。

教務主任 野口 拓也